

## 酪農学園大学構内に侵入・生息する野生哺乳類と その衛生動物としての側面

浅川 満彦

### キャンパスの概要

酪農学園大学（本学）は北海道江別市にあり、南に野幌森林公園が、北に国道12号を挟んでJR函館線の鉄道林が展開し、さらにキャンパス東西は道路を挟んで住宅地等に連なる。約120haのキャンパス内で校舎群が中央に密集し、農地・雑木林が大半を占めている（図1）。このように本学は自然環境に恵まれているので、そのキャンパス内には様々な野生の哺乳類が侵入または恒常的に生息している。一方、本学には約5000名の学生・生徒（附属高校を併設）・教職員が学び働いている。特に、本学における教育・研究の特徴は実習を含めた農業・環境の実学であるので、畢竟、これら野生動物と直接的・間接的に接する機会は非常に多いことになる。実際、2004年以来、著者が運営する本学附属野生動物医学センター（WAMC；附属動物病院構内に所在；図1左下）に野生動物に関連した相談が多数寄せられている。ここではその概要を紹介したい。



図1. 酪農学園大学キャンパス内外の様子

### エキノコックス症に関して

学生・生徒には北海道外から進学するものも多く、彼らは北海道の風土病であるエキノコックス症（エ症）についての知識をほぼ持ちあわせていない。著者が札幌生まれの学生から聞いたところ、そういった学生がキツネの糞や体毛が散在するよ

うな芝生の上で無警戒に寝転びかつ昼食を摂っているという。実際、キャンパス内の至る所でキツネの姿を見かけることがある。学生や学外の方などは、まず、写真を撮ろうと接近するはず。中には既に人慣れしている個体もいて、中々逃げない（図2）。隠れて餌付けをされているのかも知れない。本来ならば、入学直後の新入生を中心にエ症の基本情報と予防法のガイダンスを行うべきであろう。が、そのような機会はまったく提供されなかった。そこで、2019年5月、大学生に関しては礼拝の場を借り、エ症について注意喚起を行うことにした（注：本学はキリスト教系の大学なので授業として礼拝がある）。附属高校については、この時用いた資料を生徒に配布するように調整中である。なお、1995年以来、野幌森林公園に接した学内キャンパスの林地では多包虫（エキノコックスの幼虫）を宿したエゾヤチネズミやヒメネズミが確認されている（浅川・森田, 1995）。また、本学施設周辺にもエゾヤチネズミが普通に生息しており（図3）、この条虫の生活史が完結しているのは明らかである。この生活史完結は捕



図2. 本学キャンパス内を闊歩するキツネ（左）とその糞（右）（いずれも南側の農地にて著者撮影）



図3. 本学キャンパス内で確認された多包虫（南側の農地；浅川・森田, 1995より）とエゾヤチネズミ坑道（WAMC周囲にて著者撮影）

食-被食関係が機能していることを示す証左で、本学は野生動物の生態を学ぶ最良の環境ではある。しかし、あたかも「流れ弾」にあたるような形で、本学関係者にエ症発生が起きるのは恥ずべきことである。

### 咬傷や交通事故などの危険性

咬傷や交通事故等を含めば、ヒト（および学用・入院動物）へ健康被害をもたらす危険性を孕むのは前述のキツネ・野ネズミ類だけではない。その筆頭はアライグマであろう。本学キャンパスほぼ全域でその生息は確認されている。建屋への侵入も記録されており（図4）、抜本的な対応が迫られている。



図4. 附属動物病院入院牛舎に侵入したアライグマ（左と中央）とその周辺で確認されたアライグマ糞

問題のある哺乳類は外来種のみならず、在来種のタヌキ（図5）やシカ（図6）でも顕在化しつつある。最近、著者の元への相談が目立つのが前者で、初夏幼獣の保護や冬季の疥癬罹患個体（成獣）の建屋（学生サークルの部室や備品物置など）の寄り付きである。また、シカにあっては本学周辺道路での車両との衝突事例が少なくない。幸い、



図5. 附属高校に出現したタヌキ（左）と牛舎で捕獲されたタヌキの幼獣（右）



図6. 国道12号でのシカ交通事故現場（左、この写真の右上にサイロ型バス停）、この個体がWAMCに搬入された様子（中央）、シカ足跡が残された南側の農場作業道（右）

死傷者が出るような交通事故は起きてはいないようだが、特に、夜間の運転は慎重にしたい。なお、本学周辺でのシカは2000年代初頭には普通に認められるようになったが（浅川, 2004）、この個体数急増の要因が、本学がこの動物の適切な生息環境を与えていることにあるとしたら、対応を検討すべきであろう。この他、キタリスの轢死体等の処理を依頼されることも多い。多くは交通事故であり、動物愛護面でも配慮したいが、一方で、警戒心を低減させるような有志による餌付けも再検討すべきである。

### 衛生動物学教育の拠点とするには

衛生動物学はヒトの医療の上で重要な昆虫類の分類・生態・疫学などを扱う。たとえば、日本衛生動物学会の英語名称が Japan Society of Medical Entomology and Zoology と示すように、昆虫学がメインとなっているが、その他の動物群も含まれる。哺乳類は、伝統的にネズミ類が対象にされるが、吉田・有蘭（2008）によると『ヒトの近辺に棲息・・・犬、猫、キツネなど』も『医学上重要』とする言説はその他の哺乳類への対応に関して非常に示唆的である。以上に紹介したが、本学キャンパスは衛生動物学の教育・研究を展開する上で、恵まれた環境にあることは間違いない（浅川・能田, 2019）。しかし、その当事者の健康を害するようなことがあれば本末転倒で、予防衛生を啓発する機会を入念に準備したい。

### 引用文献

- 浅川満彦. 2004. 野幌森林公園にエゾシカ. ふるさとの自然, (71): 2-3.
- 浅川満彦・森田千春. 1995. 野幌原始林にもエキノコックスがいる. ふるさとの自然, (56): 8-11.
- 浅川満彦・能田 淳. 2019. 環境衛生学の衛生動物-野生動物学などコアカリ科目との関連性から. 北獣会誌, 63: 印刷中.
- 吉田幸雄・有蘭直樹. 2008. 医動物学改訂5版. 南山堂.

(酪農学園大学獣医学群)